

福岡大学
スポーツ科学部 年報
平成27年度(2015)



福岡大学スポーツ科学部
創刊号

目次

挨拶	1
活動内容	
1 学部および研究科の三つのポリシー	3
(1) スポーツ科学部	3
(2) スポーツ健康科学研究科	5
2 活動年譜	7
3 教員組織	9
4 入試状況、学生数及び卒業生数、出張講義	11
(1) スポーツ科学部	11
(2) スポーツ健康科学研究科	14
5 学部教育活動状況（成果報告および点検評価）	16
(1) 入学前教育	16
(2) 新入生懇談会	16
(3) クラス面談・修学指導	18
(4) フレッシュマンセミナー授業方法 （日本語力テスト、文章力支援システム、 全員の教員講義、コトチカ他）	19
(5) ステップアップセミナー授業法 （ジェネリックスキルテスト他）	20
(6) シラバス点検	21
(7) 学外研修参加	22
(8) ワークショップ	22
(9) 授業アンケート （実施、報告書提出、まとめ、公開）	22
6 地域連携、社会貢献、広報推進	27
7 国際交流、高大連携	29
8 教職課程	31
9 研究科教育活動状況	33
10 就職・進路	
(1) スポーツ科学部	34
(2) スポーツ健康科学研究科	35
11 外部獲得資金実績	36
12 関連資料一覧	38

平成 27 年度 年報発行にあたって

スポーツ学部長 田中 守

スポーツ健康科学研究科長 青柳 領

スポーツ科学部とスポーツ健康科学研究科では、2015 年度より学部と研究科の年間活動を総括し、記録に残すとともに学内外にその成果を公表する目的で「スポーツ科学部・スポーツ健康科学研究科年報」を発刊することにしました。学部・研究科教員の研究活動（研究業績）と社会活動、競技・指導活動は「スポーツ科学研究（大学研究紀要）」に、また現在学部として取り組んでいる教育プログラムの「体育・スポーツのエキスパート育成プログラム」と「ココロとカラダのウェルネスプログラム」は別冊として詳細を掲載していますので、本年報はこれら以外の内容になります。具体的には、目次をご覧ください。

スポーツ科学部は、1946 年（昭和 44 年）体育学部体育学科として学生定員 100 名で創設されました。その後、学生定員増（臨時定員増を含め）を何度か経て現在の学生定員 280 名となっています。1998 年（平成 10 年）スポーツ科学部への名称変更とともにスポーツ科学科と健康運動科学科の 2 学科へ改組転換し現在に至っています。2016 年（平成 28 年）3 月で 10,498 名の卒業生を輩出しています。

スポーツ健康科学研究科は、1990 年（平成 2 年）体育学研究科体育学専攻修士課程として 6 専修部門（体育学、体力学、スポーツ医学、体育科教育学、コーチ学、健康運動学）を創設しました。2003 年（平成 15 年）にスポーツ健康科学研究科スポーツ健康科学専攻に改称し、現在 6 部門 13 専修となっています。また、2004 年（平成 16 年）にはスポーツ健康科学専攻博士課程を 2 部門（健康運動科学、スポーツトレーニング科学）増設しました。2016 年（平成 28 年）3 月で 396 名の修了生（修士課程 368 名、満期退学者を含む博士課程 28 名）、12 名の課程博士と 2 名の論文博士を輩出しています。

2013 年（平成 25 年）12 月から学部役職員の変更に伴う新体制がスタートし、“学部の魅力づくり”をテーマに、“FUSS アクティブプラン（福岡大学スポーツ科学部推進計画）”の名称で取り組んでいます。スポーツ・健康運動に関する分野において社会を先導する高い専門性と気概を持った人材の育成（教育面）に加えて、これを実現できる教育環境づくり（教育組織、FD・SD）、並びに教育や社会に資する研究環境の整備（研究面）を推進し、さらに近未来に向かって学部が独自に取り組む特別プロジェクトを推進し、もって“学部の魅力づくり”を目標としています。

2014 年度の取り組みとして、本学部の意向が大きく反映された第一記念会堂の移設（建設）が決定したこと、学部所属の助教・助手制度改革は実現できなかったものの助教 1 名と助手 2 名の増員が認められたこと、卒業式後に学部全教員による卒業証書（学位記）授与式を卒業式の同会場ですべて実施したこと、広報充実のための学部ホームページのリニューアルや第二記念会堂ロビーでの学部魅力情報の提供など新規に実現できた案件と、継続的な教育活動、地域・社会貢献

活動、国際交流活動、高大連携活動、就職・進路支援活動等を行いました。また、2014年3月に退職された田口正公教授（スポーツバイオメカニクス）、山本勝昭教授（スポーツ心理学）、2015年3月に退職された清永明教授（スポーツ医学）は永年のご功績が評価され名誉教授の称号が授与され、2014年3月に退職された遠藤勝恵教授（保健体育科教育法）、山崎一彦准教授（陸上競技コーチ学）、2015年3月に退職された小清水孝子教授（スポーツ栄養学）は10年前後の短い期間でしたが、本学部・研究科へ多大なご貢献をいただきました。書面をお借りし感謝申し上げます。なお、2014年度はこれらの先生方の後任人事に加え、空席の専任教員4名の人事を含めて、2015年4月新採用人事がほとんど決まりました。

本年報は2015年度（平成27年度）の学部・研究科総括ですので、概略を紹介します。国際スポーツ人材育成・派遣プロジェクトとして、青年海外協力隊（JICA）と本学との協定締結により、連携ボランティアとしてサッカー部と硬式野球部の多くの本学部生・研究科生が1ヶ月間ボリビアに派遣されたことは、新規の事業となります。また、教育推進経費として前記2つの教育プログラムが2015年度も継続して採用されました。釜山大学との大学院国際学術交流も2015年度で4回目になります。この他、継続的な教育活動、地域・社会貢献活動、国際交流活動、高大連携活動、就職・進路支援活動等を行いました。

本学では、1996年（平成8年）から大学基準協会の「大学評価マニュアル」に基づき、自己点検・評価を開始しました。その後、自己点検・評価の実施と結果公表の義務化に伴い2000年度（平成12年度）に第2回目の自己点検・評価を行いました。2004年（平成16年）からは第三者機関（認証評価機関）による認証評価を7年に1回受けることが義務付けられ、本学では2007年度（平成19年度）に第3回目、2014年度（平成26年度）に第4回目の自己点検・評価を行い、翌年“大学基準協会に適合”との認証評価を受けました。2015年度（平成27年度）からは毎年自己点検・評価を行うことになり、本年報が学部基礎データ調書資料としても活用できることになります。

1 学部および研究科の三つのポリシー

(1) スポーツ科学部 三つのポリシー

❖ アドミッション・ポリシー（入学者受入れの方針）

スポーツ科学部は人材養成の目的を達成するために、

1. スポーツを日常的に実践している人
2. スポーツや身体運動を対象に積極的に科学しようとする人
3. 競技スポーツにおけるパフォーマンスの向上を目指す人
4. 体育教員、スポーツコーチ、インストラクター、健康運動指導士などスポーツや健康全般にかかわる職種を目指そうとする人

の入学を求めています。

❖ カリキュラム・ポリシー（教育課程編成・実施の方針）

スポーツ科学部はスポーツ・運動を科学し、実践することができる能力を身につけるため、カリキュラムは教養科目と並列に専門的基礎科目を1年次より配置し、学生個々の興味と関心に基づいて専門分野が選択できるように必修科目を極力少なくし、選択科目を多く配置します。実技実習科目は、自ら専門とする種目のコーチング理論を深めるために演習形式の授業形態をとります。健康運動に関わる科目は、現場の実践に即した科学的指導やプログラム開発ができるように学外の実習を配置します。

スポーツ科学科は、競技スポーツおよびスポーツ全般にわたる専門性を高めることをねらいとし、健康運動科学科は、運動による健康を通して国民のクオリティオブライフ向上に貢献することをねらいとして、それぞれの学科の特性にあったカリキュラム編成とします。

❖ ディプロマ・ポリシー（学位授与の方針）

スポーツ科学部はスポーツ・運動を科学的知識に基づいて実践・指導ができることを特に重視し、所定の単位を修め、次の能力を備えた学生に学位を授与します。

1. スポーツや運動全般の科学的指導能力
2. 専門とするスポーツ・運動の高い技術習得と指導能力
3. スポーツ・運動に関する医科学的知識と研究方法の習得及び卒業論文作成能力
4. スポーツ・運動を通して得られた社会や職業活動に必要なコミュニケーション、課題解決、倫理的行動能力

■ **スポーツ科学科**

＜人材養成および教育研究上の目的＞

スポーツ科学科は、スポーツ競技力や運動能力の向上を目指したスポーツの医科学的知識を有し、スポーツ界・教育界・産業界・官界等において、スポーツ医科学の知識に基づいた適切なスポーツの実践と理論的指導ができる人材養成を中心に、科学的トレーニング法のみならず施設や用具等の開発、スポーツイベント等の企画・運営を含めたスポーツマネジメント等ができる人材も養成することを目的とする。

スポーツ科学科 三つのポリシー

♣ アドミッション・ポリシー（入学者受入れの方針）

スポーツ科学科はスポーツに関わる人材養成・教育研究上の目的を達成するために、

1. スポーツを日常的に実践している人
2. スポーツを対象に積極的に科学しようとする人
3. 競技スポーツにおけるパフォーマンスの向上を目指す人
4. 体育教員、スポーツコーチ、インストラクター、トレーナー等スポーツに関わる職種を目指そうとする人
5. プロ・企業スポーツにおいてトップアスリートおよびその指導者、警察官、消防士などの公務員、企業全般の職種を目指そうとする人の入学を求めています。

♣ カリキュラム・ポリシー（教育課程編成・実施の方針）

スポーツ科学科はスポーツを科学し、実践する能力を身につけるため、カリキュラムは共通教育科目と並列に専門基礎科目を1年次より配置し、学生個々の興味と関心に基づいて専門分野が選択できるように必修科目を極力少なくし、選択科目を多く配置しています。実技実習科目は、自ら専門とする種目のコーチング理論を深めるために演習形式の授業形態をとっています。また、意図的、計画的に専門教育を進めるために、一部選抜制を含むコースを設定して、カリキュラムの中にアスリート・コーチコース推奨科目群、トレーナーコース推奨科目群、保健体育教員コース推奨科目群、生涯スポーツ教育コース推奨科目群、コース共通科目群を設け、将来を見据えた専門的知識や技能を高め、社会の進歩や変革に応え得る深い学識を有する人材を育成します。

♣ ディプロマ・ポリシー（学位授与の方針）

スポーツ科学科は、スポーツの科学的知識に基づいて実践・指導ができることを特に重視し、所定の単位を修め、次の能力を備えた学生に学位を授与します。

1. スポーツ・運動全般の医科学的知識を有し、自ら発見した新たな課題を解決する力
2. 専門とするスポーツの高い技術習得と指導する力
3. スポーツを通して得られた社会や職業活動に必要なコミュニケーション能力、倫理的思考力を有し、社会の一員として社会の発展に寄与できる力

■ 健康運動科学科

<人材養成および教育研究上の目的>

健康運動科学科は、健康運動やレクリエーション活動に関し、心身の健康の回復、保持、増進を目指した医科学的知識を有し、地域社会・教育界・産業界・医療分野等において、創造的・実践的な指導を行うことができる人材養成を中心に、企業や地域・医療とも連携した健康づくりマネジメント等ができる人材も養成することを目的とする。

健康運動科学科三つのポリシー

❖アドミッション・ポリシー（入学者受入れの方針）

健康運動科学科は、健康運動やレクリエーション活動に関する人材養成・教育研究上の目的を達成するために、

1. 健康運動やレクリエーション活動を日常的に実践している人
2. 健康運動やレクリエーション活動を対象に、積極的に科学しようとする人
3. 体育教員、インストラクター、健康運動指導士などスポーツや健康全般に関わる職種を目指そうとする人
4. 地域社会、産業界、医療分野等でスポーツや体育、レクリエーション活動の指導者を目指す人の入学を求めています。

❖カリキュラム・ポリシー（教育課程編成・実施の方針）

健康運動科学科は、健康運動やレクリエーション活動を科学し、実践・指導することができる能力を身につけるため、カリキュラムは共通教育科目と並列に専門的基礎科目を1年次より配置し、学生個々の興味と関心に基づいて専門分野が選択できるように必修科目を極力少なくし、選択科目を多く配置しています。健康運動に関わる科目は、現場の実践に即した科学的指導やプログラム開発ができるように学外の実習を配置しています。また、意図的、計画的に専門教育を進めるために、一部選抜制を含むコースを設定して、カリキュラムの中に健康運動指導者コース推奨科目群、保健体育教員コース推奨科目群、生涯スポーツ教育科目群、コース共通科目群を設け、将来を見据えた専門的知識や技能を高め、社会の進歩や変革に応え得る深い学識を有する人材を育成します。

❖ディプロマ・ポリシー（学位授与の方針）

健康運動科学科は健康運動やレクリエーション活動を科学的知識に基づいて実践・指導ができることを特に重視し、所定の単位を修め、次の能力を備えた学生に学位を授与します。

1. 健康運動やレクリエーション活動の医科学的知識を有し、自ら発見した新たな課題を解決する力
2. 専門とする健康運動やレクリエーション活動の高い技術習得と指導する力
3. 健康運動やレクリエーション活動を通して得られた社会や職業活動に必要なコミュニケーション能力、倫理的思考力を有し、社会の一員として社会の発展に寄与できる力

(2) スポーツ健康科学研究科スポーツ健康科学専攻（博士課程前期・後期）

<人材養成および教育研究上の目的>

スポーツ健康科学研究科スポーツ健康科学専攻は、運動、スポーツ、レクリエーション、レジャー、体育、健康、福祉等を対象とする学問の深化を図り、新しい世紀のウェルネス社会実現に向けて貢献し、高度なスポーツ知を拓く研究科として機能することを教育理念とする。博士課程前期では、競技スポーツ・学校体育・地域スポーツ・医療等の指導現場において高度な知識と技術を基に、体育・スポーツ・健康・レクリエーションに関する科学的指導を実践・応用できる専門家の養成を行う。博士課程後期では、健康増進や疾病・障害の治療・予防・再発防止を目的とした運動プログラムの開発・実践に関する研究や、幼少期から高齢期に至るライフステージに応じたスポーツパフォーマンスの向上を目的とした研究などの専門的な領域について自立して研究

活動を行い得る研究者を養成する。

スポーツ健康科学研究科スポーツ健康科学専攻三つのポリシー

❖ アドミッション・ポリシー（入学者受入れの方針）

本研究科は、博士課程前期では、指導現場において科学的指導を実践・応用できる人材を育成するという観点から、

1. スポーツや運動を科学的観点から研究することに興味のある人
2. 競技スポーツにおいてパフォーマンスを向上させる科学的方法に興味のある人
3. 教育の現場でより高度な科学的成果を取り入れようとしている人
4. 医療現場で運動により健康の維持や疾病の予防しようとする人

の入学を求めている。また、博士課程後期では、高等教育機関あるいは研究機関において独立して研究できる人材を育成するという観点から、

1. 基礎的な学力を有し、創造的で柔軟な発想を持ち、研究を遂行することができる人
2. 博士課程前期では十分な研究成果を得られず、研究を継続することを望む人
3. 医療や健康増進に強い熱意がある人
4. 広く自分の研究成果を国外にも発信したい人
5. スポーツ・体育分野の出身者以外にもスポーツや健康を科学的に研究することに興味のある人の入学を求めている。

そのため、体育、体育・スポーツ科学関連学部の卒業生のみならず、広範囲からの領域の学生の受け入れを目指している。特に、社会人や外国人は積極的に受け入れる。

❖ カリキュラム・ポリシー（教育課程編成・実施の方針）

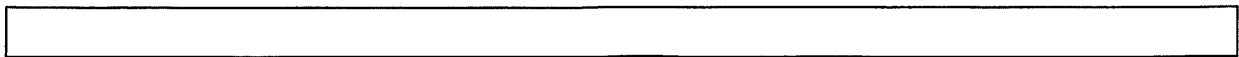
博士課程前期では、各自の専門性を高めるために、各部門ごとに「特別研究」と「特講」などの専修科目を設置し、同時に、関連する領域の知識の獲得を意図した非専修科目を配置している。特に、スポーツ医学部門では講義科目と対応した実習科目が用意されている。さらに、論文指導教員全員によるオムニバス形式の科目は部門の枠を越えて幅広い知識の獲得を目指している。

博士課程後期では、博士論文指導を目的とした「特別研究」以外にも、全論文指導教員および論文指導補助教員によるオムニバス形式の科目を配置し、基本的なリサーチメソッドの獲得に資している。

❖ ディプロマ・ポリシー（学位授与の方針）

博士課程前期では、修士論文の完成度を高めるために中間報告会での発表と、外部からの評価を受けるために関連学会での発表を義務づけている。博士課程後期では、最終論文提出の半年前に中間報告に相当する研究計画書の提出・審査を義務づけている。また、博士論文の外部からの評価を受けるために国際誌あるいは全国誌への掲載を義務づけている。

2 活動年譜



2015年		【学部】	【研究科】
4月	1日	入学式	入学式
	2日	新入生ガイダンス	
	4日	新入生懇談会	
		ステップアッププログラム「先輩と語る」第1回	
	8日	前期授業開始	新入生ガイダンス 前期授業開始
6～7月		修学指導	
6～7月		父母懇談会（本学・各地） 前期授業アンケート	
7月	4日		大学院推薦入試
	23日	前期授業終了	
	24日	前期定期試験開始	
8月	2・3日	プール実習	
	2日	前期試験終了 前期集中開始	
	3・4・5日	ゴルフ実習	
	4日	夏季休業開始	
	7日	前期集中終了	
	8日	オープンキャンパス	
	9・10日	プール実習	
	14～18日	キャンプ実習（前半）	
	25～28日	キャンプ実習（キャンプⅡ）	
	31日		修論中間報告会
9月	3～7日	キャンプ実習（後半）	
	7日		秋季大学院入試
	8～11日	海浜実習	
	13日	夏季休業終了	
	14日	後期授業開始	
10月	26日	前期卒業式	学位記授与式（修士）
	31～11月2日	学園祭	
11月	25・26日	A方式	

12月	12日	学部祭 ステップアッププログラム「先輩と語る」第2回 大学と社会	
	27日	冬期休業開始	

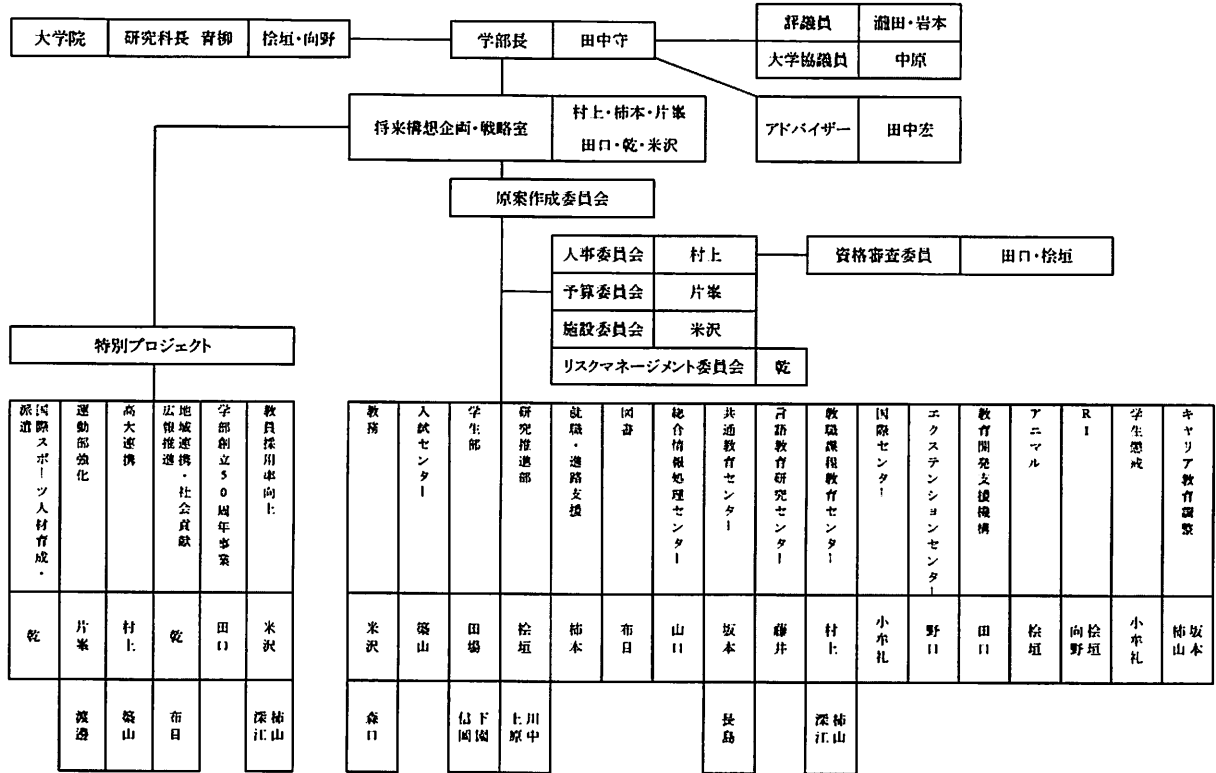
2016年		【学部】	【研究科】
1月	4日	冬期休業終了	
	5日	後期授業再開	
		後期授業アンケート	
		シラバスチェック	
	14日	FD ワークショップ	
	16・17日	センター試験	
	18日	後期授業終了	
	19日	後期試験開始	
	25日		釜山大学との学術交流会
	28日	後期試験終了	
29日	卒業論文発表会 謝恩会		
2月	2日～	入試・系統別	
	3日～	入試・前日日程	
	7日～	入試・GS実技	
	8日		修士論文発表会・公聴会
	24日		春季大学院入試
3月	3日	スポ特別募集	
	6日	入試・後期日程	
	19日	卒業式	学位記授与式（修士）
	日	授業アンケート報告	
	22日	在学生履修登録開始	学位記授与式（博士）
	30日	在学生履修登録終了	

3 教員組織 (2015年度)

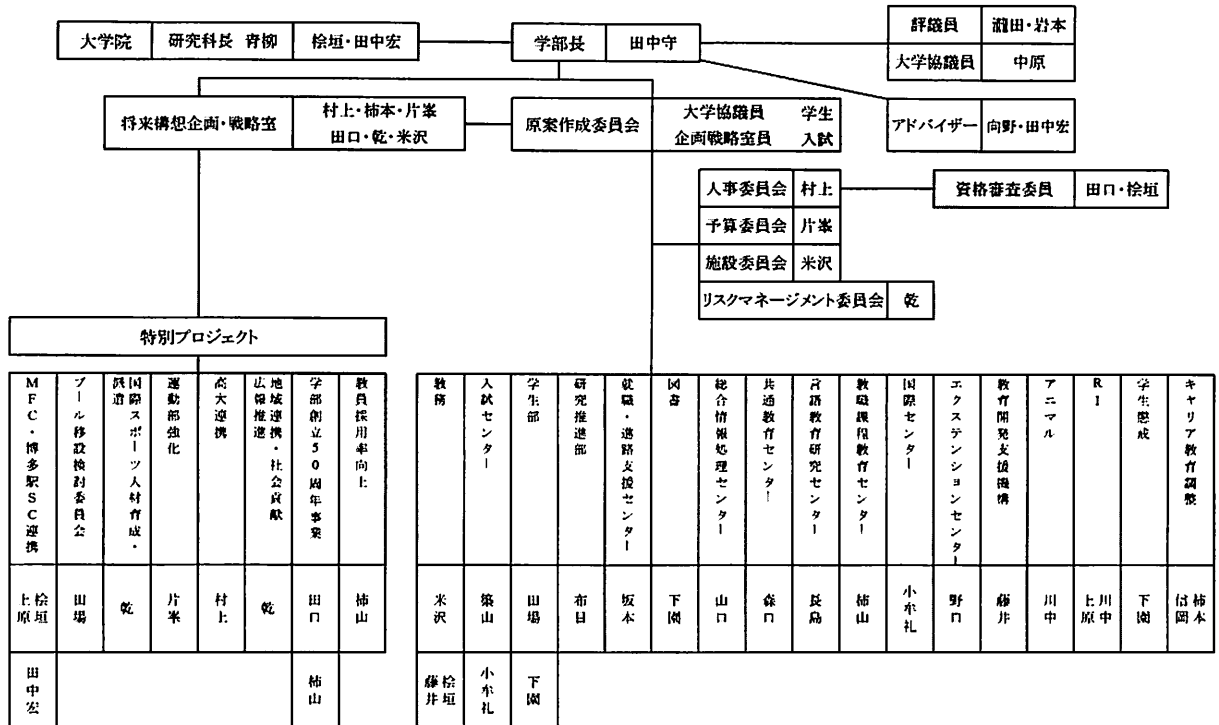
スポーツ科学部長 田 中 守

教 授	青 柳 領 (幼児発育発達・スポーツ計量論)								
	乾 真 寛 (コーチ学・サッカー)								
	岩 本 英 明 (スポーツ整形外科・スポーツ医学)								
	上 原 吉 就 (スポーツ内科学・スポーツ医学・予防医学)								
	柿 山 哲 治 (スポーツ教育学・保健体育科教育学)								
	片 峯 隆 (コーチ学・運動学・バイオメカニクス・陸上競技)								
	川 中 健太郎 (スポーツ栄養学・生化学・分子運動栄養学)								
	小牟礼 育 夫 (スポーツ方法学・バスケットボール)								
	下 園 博 信 (スポーツ心理学・スポーツ方法学・ラグビー)								
	瀧 田 伸 吾 (スポーツ運動学・剣道)								
	田 口 晴 康 (スポーツ運動学・体操競技・器械運動)								
	田 中 宏 暁 (運動生理学・体力学・健康科学)								
	田 中 守 (体力学・トレーニング学・生理学・ハンドボール)								
	中 原 一 (スポーツ方法学・柔道)								
	布 目 寛 幸 (バイオメカニクス)								
	檜 垣 靖 樹 (スポーツ生理学・健康運動学・予防医学)								
	藤 井 雅 人 (スポーツ社会学・スポーツ教育学)								
	向 野 義 人 (鍼灸医学・内科学・スポーツ医学)								
	村 上 純 (スポーツ方法学・コーチ学・ラグビー)								
	山 口 幸 生 (運動心理学・行動科学・テニス)								
	米 沢 利 広 (スポーツ方法学・バレーボール)								
特任教授	深 江 久 嗣 (保健体育科教育学)								
准 教 授	柿 本 真 弓 (コーチ学・ダンス・体操・新体操競技)								
	築 山 泰 典 (野外教育学・レクリエーション)								
	森 口 哲 史 (公衆衛生学・学校保健・ハンドボール)								
講 師	坂 本 道 人 (コーチ学・柔道)								
	田 場 昭一郎 (コーチ学・競泳)								
	長 島 和 幸 (体育哲学・スポーツ史・レスリング)								
	野 口 安 忠 (コーチ学・スポーツ方法学・陸上競技)								
	信 岡 沙希重 (コーチ学・陸上競技)								
	渡 邊 正 和 (バイオメカニクス・コーチ学・硬式野球)								
助 教	伊 賀 崇 人 橋 本 和 俊 助 手 大 山 泰 史								
	泉 原 嘉 郎 秀 泰 二 郎 久 芳 恵 里 佳								
	伊 藤 寿 浩 水 崎 佑 毅 後 藤 志 保								
	池 永 昌 弘 森 井 大 樹 薄 奈 津 美								
	栗 田 昇 平 森 村 和 浩 高 山 侑 花								
	黒 崎 辰 馬 羅 成 圭 富 岡 早 紀								
	櫻 木 規美子 安 方 惇 花 田 彬								
	田 村 雄 志 向 尾 理 司								
	當 眞 裕 樹 山 崎 郁 美								
	中 原 麻衣子 山 口 祐一郎								

スポーツ科学部組織図(～2015.12)



スポーツ科学部組織図(2016.1～)



4 入試状況、学生数及び卒業生数、出張講義

(1) スポーツ科学部

築山 泰典

■ 推薦入試

A方式推薦入試に関しては、スポーツ科学科に関しては、募集人員 54 名に対し、出願者 133 名で合格者 51 名と競争率は 2.6 であった。また、健康運動科学科に関しては、募集人員 16 名に対し、出願者 23 名で合格者 19 名であった。しかし、この時、健康運動科学科では第二志望合格 9 名を含むため競争率は 2.3 倍を示す。両学科とも競争率は 2.6 と 2.3 とバランスを保っているように見られるが、募集人員の少ない健康運動科学科において第 2 志望合格を継続実施している状況もある。今後、学科特性を考慮した学科別の推薦入試制度の設置検討が必要なことと考える。

次に、スポーツ特別推薦においては、両学科を通じ募集人員 38 名程度での実施であるが、スポーツ科学科出願者 54 名に対し合格者 49 名競争率 1.1 であり、健康運動科学科では出願者 5 名に対し合格者 2 名競争率 2.5 を示し、学部としては 51 名の合格者とする結果であった。本推薦入試においては、大学全体としての運動部活動強化の意味合いが強く、全学として 77 名の出願に対し 66 名の合格者であり、合格者に占める本学部への入学者は 77.3% に及ぶ。平成 29 年度入試より、第 1 希望をスポーツ科学部としながらも、第 2 希望として他学部を出願することが可能となる制度変更が実施された。今年度はこの制度導入初年次であるため、77.3% との入学者の偏りがどれだけ是正されるか不明ではあるが、大学全体としての運動部活動強化の施策としての本推薦入試の在り方を継続的に検証する必要があるものと考ええる。

現状、他にも付属推薦入試及び指定校推薦入試を実施しており、学部入学定員 280 名に対し、推薦入試合格者数が 140 名と 50% の上限となっている。今後、募集人員の見直しを含む本学部に係る入試制度の継続的検討が必要なものと考ええる。

推薦入試状況

学科	A方式推薦入試					スポーツ特別推薦入試			
	募集人員	志願者	受験者	合格者	競争率	募集人員	志願者	合格者	競争率
スポーツ科	54	133	133	51	2.6	38 程度	54	49	1.1
健康運動科	16	23	23	* 19	2.3		5	2	1.2

競争率=受験者÷合格者（第二志望合格者を除く）、（スポーツ特別推薦入試は志願者÷合格者）*欄は第二志望合格者(9人)を含む

(福岡大学 2017 大学案内 P224 より一部抜粋)

■ AO 入試

公開練習会への参加者は、358 名と昨年度の 328 名に対し 9.1% の増加を示した。

スポーツ科学科に関しては、募集人員 33 名に対し、出願者 198 名で合格者 34 名と競争率は 5.8 であった。また、健康運動科学科に関しては、募集人員 7 名に対し、出願者 21 名で合格者 7 名であった。しかし、この時、健康運動科学科では第二志望合格 3 名を含むため競争率は 5.3 倍を示す。学科間の競争率は、バランスを保っている状況であるが、推薦入試と同様第 2 希望合格は

健康運動科学科にのみ認められる状況に変わりはない。平成 26 年度においては第二志望合格の影響により、健康運動科学科の競争率が 24.0 とスポーツ科学科の 4.9 と比して明らかに高値を示すこともあった。入学希望者の立場からは、このような状況は健康運動科学科を敬遠する流れにもつながることと考える。継続的に学科間の競争率のバランスを保つことを試みる必要があるものとする。

AO 入試状況

学科	募集人員	公開練習会等の参加者	受験者	合格者	競争率
スポーツ科	33	358	198	34	5.4
健康運動科	7		21	* 7	5.5
合 計			199	40	5.4

競争率=受験者÷合格者（第二志望合格者を除く）*欄は第二志望合格者(3人)を含む

(福岡大学 2017 大学案内 P209 より)

■ 一般入試

系統別では、スポーツ科学科に関しては、募集人員 5 名に対し、受験者 117 名で合格者 17 名と競争率は 6.6 であった。また、健康運動科学科に関しては、募集人員 2 名に対し、受験 69 名で合格者 8 名と競争率は 8.6 であった。

また、前期日程では、スポーツ科学科として募集人員 60 名に対し、実技型においては受験者 428 名で合格者 82 名と競争率は 5.2 を、小論文型においては受験者 114 名で合格者 24 名と競争率は 4.8 を、それぞれ示す結果であった。また、健康運動科学科に関しては、募集人員 20 名に対し、受験 226 名で合格者 40 名と競争率は 5.7 であった。次に後期日程では、スポーツ科学科に関しては、募集人員 7 名に対し、受験者 51 名で合格者 7 名と競争率は 7.3 であった。また、健康運動科学科に関しては、募集人員 3 名に対し、受験 18 名で合格者 3 名と競争率は 6.0 であった。

そして、センター試験利用 I 期では、スポーツ科学科に関しては、募集人員 5 名に対し、受験者 140 名で合格者 37 名と競争率は 3.8 であった。また、健康運動科学科に関しては、募集人員 3 名に対し、受験 83 名で合格者 17 名と競争率は 4.9 であった。最後にセンター試験利用 II 期では、スポーツ科学科に関しては、募集人員 4 名に対し、受験者 94 名で合格者 31 名と競争率は 3.0 であった。また、健康運動科学科に関しては、募集人員 3 名に対し、受験 66 名で合格者 23 名と競争率は 2.9 であった。

一般入試において日程及び試験形態の違いから多様な入試形態が展開される状況にある。この多様な入試形態別に、学部としてまた学科としての求める学生像をより明確に示すことで、「より高い目的意識を持った入学者の獲得」を目指すことが今後も必要なことと考える。

一般入試（系統別日程）

学科	募集人員	志願者	受験者	合格者	競争率	合格 最高点	合格 最低点
スポーツ科	5	115	112	17	6.6	341	269
健康運動科	2	71	69	8	8.6	334	281

一般入試（前期日程）

学科	募集人員	志願者	受験者	合格者	競争率	合格 最高点	合格 最低点
スポーツ科	60	実技型					
		441	428	82	5.2	248	188
		小論文型					
		114	114	24	4.8	223	183
健康運動科	20	226	226	40	5.7	229	200

一般入試（後期日程）

学科	募集人員	志願者	受験者	合格者	競争率
スポーツ科	7	51	51	7	7.3
健康運動科	3	18	18	3	6.0

大学入試センター試験利用入試（Ⅰ期）

学科	募集人員	志願者	受験者	合格者	競争率
スポーツ科	5	141	140	37	3.8
健康運動科	3	83	83	17	4.9

大学入試センター試験利用入試（Ⅱ期）

学科	募集人員	志願者	受験者	合格者	競争率
スポーツ科	4	94	94	31	3.0
健康運動科	3	66	66	23	2.9

競争率=受験者÷合格者（第二志望合格者を除く） 一般入試（系統別日程）は400点満点。

（福岡大学 2017 大学案内 P216-217 より）

■ 学生数及び卒業生数

平成 27 年 5 月 1 日段階でのスポーツ科学部学生数は、スポーツ科学科 945 名(1 年次 248 名、2 年次 229 名、3 年次 237 名、4 年次以上 231 名)、健康運動科学科 322 名(1 年次 78 名、2 年次 76 名、3 年次 80 名、4 年次以上 88 名)の合計 1,267 名である。

この時、年間取得目安単位数を 30 単位と設定し、それ以下の取得数の学生を単位習得不振者とみなした時、2 年次生の 12.6%、3 年次生の 12.9%、4 年次生の 14.0%の割合が示される状況にある。また、平成 27 年度本学部の卒業生者比率は 85.1%に留まる状況であり、本学他学部と比較して第 2 位と上位の卒業生者比率を示すものの、平成 27 年度の 87.9%と比して低い状況が示された。継続的に卒業生者比率を高める面談等の実施が必要なことと考える。

学生数 (平成 27 年 5 月 1 日現在)

		1 年次	2 年次	3 年次	4 年次以上
スポーツ科学科	945	248	229	237	231
健康運動科	322	78	76	80	88
合計	1,267	326	305	317	319

学部・年次別の単位修得不審者の状況 (平成 28 年 4 月 1 日現在)

	平成 27 年度入学生 (15 台)	平成 26 年度入学生 (14 台)	平成 25 年度入学生 (13 台)
修得単位 学部・学科	30 単位以下	60 単位以下	90 単位以下
スポーツ科学部	12.6	12.9	14.0

(平成 28 年度父母懇談会のしおり p10-11 より一部抜粋)

■ 出張講義

2015 年度入学センターより依頼があり実施した出張講義・模擬講義数は 18 件(延べ生徒数 871 名)であった。福岡県下での実施が 13 件と最も多いが、佐賀県、広島県、山口県、熊本県、鹿児島県からも依頼があり、それぞれ教員の協力により実施することができた。

また、10 月 17 日にはマリンメッセ福岡で開催された「夢ナビライブ 2015」に参画し、259 名の生徒と直接かかわる機会を得た。2016 年度は入学センター手動にて大学全体としての模擬講義パンフレット「模擬講義 NAVI2016」も発行され本学部教員 17 名も掲載されている。今後、このパンフレットを活用した広報にも積極的に関わっていく必要があるものとする。

(2) スポーツ健康科学研究科スポーツ健康科学専攻

檜垣 靖樹

■ 平成 27 年度入試状況

アスリート推薦入試

	志願者	受験者	合格者
博士課程前期	0	0	0

一般入試

	秋季*		
	志願者	受験者	合格者
博士課程前期	6(1)	6(1)	5(0)
博士課程後期	2(1)	2(1)	2(1)

春季*		
志願者	受験者	合格者
4(2)	4(2)	4(2)
2(1)	2(1)	2(1)

* () 内 社会人

推薦入試**

	志願者	受験者	合格者
博士課程前期	4(1)	4(1)	4(1)

** () 内 早期履修者数

■ 平成 27 年度 学生数及び修了生数

学生数 (平成 27 年 5 月 1 日現在)

		1 年次 (飛び級含む)	2 年次 (前期は 2 年次 以上も含む)	3 年次 (後期のみ)
博士課程前期	25	10	15	
博士課程後期	12	4	6	2
合計	37	14	21	2

平成 27 年度の卒業生については、博士課程前期修了 15 名、早期履修 2 名の合計 17 名が学位(修士号)を取得。博士課程後期修了 1 名が学位(博士号)を取得し、満期退学が 1 名であった。

5 学部教育活動状況

(1) 入学前教育

築山 泰典

AO 入試及び推薦入試合格者 175 名に対し、外部業者と連携し、基礎国語 3 講、スポーツ科学入門 7 講の計 10 講からなる通信教育による入学前教育を実施している。今年度は、2 月 25 日現在での未着手者に対し、部活担当教員より電話にて指導頂き、全員に入学前教育を実施することができた。

しかし、2 講目までは提出率が 100%であるが、後半実施率は低下し、最終 10 講まで提出することができた受講生は、149 名(85.1%)に留まる結果であった。また、得点も昨年度平均 93.7 点を示していたが、今年度は 92.7 点と 1 点低下する状況であった。また、第 10 講のデータ処理に関しては、例年他講と比較し、著しく低値を示すが今年度も 73.4 点となった。昨年 の 71.1 点より高くなるものの、データ解釈が苦手な学生は多い状況にある。最終講まで提出している、受講態度がまじめな学生の示す点数であるため、数学関連科目の強化を検討する必要があるものと考ええる。

本教育に対する受講生の評価について、DVD の講義の進度は 49.5%が「ちょうど良い」と、また講師の教え方も 48.5%が「分かりやすい」と回答している。確認テストのレベルも 53.6%が「ちょうど良いと、この講義を受けての評価も 79.2%が「良かったと思う」と回答しており、本取り組みは、受講生にとっても概ね好評であると考えることができる。

(2) 新入生懇談会

田場 昭一郎

新入生懇談会は、以下の内容を新入生に理解させ、活力ある学生生活となるための動機づけを行うものとし実施している。

- 1) 福岡大学の校訓を理解し、充実した学生生活を送るための諸注意。
- 2) スポーツ科学部生としての自覚を促し、スポーツ活動に専心する心構えと勉学に励む態度を啓発する。
- 3) 各種委員からのガイダンスにより、学生生活を円滑に始められるようにする。

<日 時> 平成 27 年 4 月 4 日 (土曜日) 9 時集合 (開会 9 時 15 分)

<場 所> A 棟 201 教室および第二記念会堂体育館

<内 容> スポーツ科学部長挨拶

健信会会長挨拶

総務委員からの案内

学生部ガイダンス (大学生生活に関わる諸問題とその対応について)

福大生ステップアッププログラム「先輩と語る」

海外研修報告

体育・スポーツのエキスパート教育プログラム

日本語力テスト

各種委員会からの連絡と諸注意

- (1) 就職進路支援センター委員
- (2) 国際交流センター委員
- (3) 図書委員
- (4) 健康管理センター
- (5) HDセンター
- (6) 福岡リーガルクリニック法律事務所

早良警察署による連絡と諸注意（防犯・交通マナー講習）

福岡大学校歌の斉唱

スポーツ科学部教職員スタッフ紹介

各担当教員によるクラス担任別懇談会（グループディスカッション）

部活動アンケート調査

成果報告および点検評価

例年、新入生の新学期の事前指導と称して新入生懇談会を実施している。競技スポーツは、競技規則を厳守し、スポーツマンシップの精神で行われる。スポーツ科学部では、スポーツに携わる人材育成を目標とし、学部生としての自覚を促すことを念頭に、この懇談会は実技の授業等で活用する学部ユニフォーム（赤色のジャージ）を着用して参加することを義務付けており、挨拶の励行、行動の敏速、時間の厳守を徹底している。また、この懇談会を通じて体育・スポーツに関わる者として、体を動かすことの社会的役割や生涯的価値を考えるよう心掛けている。さらに健信会会長（福岡大学スポーツ科学部の同窓会）の挨拶で、有信会（福岡大学の同窓会）との関わりや、卒業生との帰属意識を高めることの意義について説明が行われ、このような講話も、社会人となるまでの最終教育機関としての位置付けにある大学入学時において心に響く内容である。学生部ガイダンスでは、学生生活を送るにあたっての諸注意、困った時の学内における対応窓口について、さらに実際の学生生活の中で起こりうる問題点なども説明している。またスポーツ科学部の年間行事で、新入生懇談会とスポーツ科学部祭の2つのイベントを通じて福大生ステップアッププログラム「先輩と語る」を実施しており、先輩の講話に学生は熱心に耳を傾けていた。また海外研修報告では「ピークパフォーマンス演習 II」の授業と並行して行なわれている「体育・スポーツのエキスパート教育プログラム」を利用して、海外研修に行った学生のプレゼンテーションが行われた。慣れない土地での先輩の活躍に、新入生も興味を示す様子が伺えた。午後の部も、各種委員による事細かな説明が行われ、第二記念会堂に場所を移動し、学生指導に携わる先生の紹介、各教員別のクラスに分かれてのグループディスカッション、さらにはアンケート調査も実施し充実した内容であった。

■ クラス面談について

スポーツ科学部では、1・2年生を対象にクラス別個人面談（グループディスカッション）を実施している。クラス別個人面談は、講師以上の専任教員が10～12名程度のクラスを担当し、定期的に学生の実態調査を行うもので、学生の生活状況や生活態度を把握するとともに、学生に対する注意喚起を目的としている。大学生活を通じての授業等や正課外活動、または所属する運動部やサークル等の課外活動、アルバイト等の活動における問題点や悩みなどに対応し、個々にアドバイスできるような指導体制である。

なお、面談については以下の通りである。

- (1) 新入生懇談会でグループディスカッション（4月4日）
- (2) 各担当教員における1年生を対象とした個人面談（前後期に各1回）

前期：7月11日 / 後期：9月30日

- (3) 各担当教員における2年生を対象とした個人面談（前後期に各1回）

前期：5月18日～5月29日 / 後期：10月1日～10月10日

1年生は、学士課程の教育充実を図るために、基礎教育と導入教育を目的とした「フレッシュマンセミナー」が開講されているが、その授業の1コマとして前後期に各1回ずつ個人面談を実施している。

2年生は、1年生からの継続的指導として、前後期に一定の期間を設けて面談を実施している。

3年生以降は、必修科目である卒業論文の事前指導として開講されているスポーツ科学演習で、各担当教員のゼミナールに所属し、卒業までの個別指導が行われる。

スポーツ科学部では、このような取り組みによって徹底した学生の指導体制を構築しており、学生も様々な立場にある教職員のアドバイスを受け、4年間の充実した学生生活が期待され、その成果は非常に大きい。

■ 修学指導について

スポーツ科学部は、前述した通り全学生を対象としたクラス別個人面談はもちろんの事、別途、修学指導対象の学生に対して面談を実施しており、個人面談だけでは事足りない学生に対しての措置も十分に行われている。また対象となる学生は以下の通りである。

- (1) 2年生：前年度の取得単位数が23単位以下の学生（登録単位数の半分以下の学生が対象）
- (2) 3年生：前年度までの取得単位数が46単位以下の学生
- (3) 4年生以上：1～3年次までの取得単位数が77単位以下の学生（卒業見込みなし）

2015年度は、39名の学生（2年次生：13名、3年次生：11名、4年次生以降：15名）を対象に、掲示によって連絡し、2015年6月9日（火）16時30分から1221教室において、出席した11名（2年次生：7名、3年次生：3名、4年次生以降：0名）の学生に修学指導を行った。欠席者の28名については、もう一度掲示によって連絡し、呼び出しを行った。1回目欠席した28名

の対象学生で、2回目の修学指導に出席した学生は、9名（1年次生：1名、2年次生：3名、4年次生以降：5名）であった。

2回の修学指導には、教務委員、学生部委員、教務関係担当助教の3名の教員が個別に面談を行った。

面談の内容については、修学指導記録書に「なぜ単位が取れなかったのか?」、「今後の対応はどうするのか?」といった点を中心に記録し、学生の指導を行った。単位が取れなかった理由として、授業の欠席が多いこと、試験勉強が十分にできなかったこと、試験そのものができなかったことを挙げている。中には、試験勉強の方法がわからない学生もいた。このような点を踏まえ、試験勉強に対するアドバイス、授業への出席の指導、今後の進路に対するアドバイスと指導を行った。

修学指導の面談結果等については、2015年度7月15日（水）の教授会の中で報告を行った。また、1年次生については、前期試験の成績が出ていないため、修学指導ができないので、5月13日（水）の教授会において、クラス担任による面談の中で指導していただくように口頭でお願いをした。

このような修学指導やクラス担任の面談によって、学部別卒業生比率（平成27年度）では、医学部看護学科の91.9%に次ぐ、85.1%と高い卒業比率であった。1年次からのクラス担任制による年4回の面談と、2年次以降の学生に対する早期の修学指導の効果が十分に表れていると考えられる。

今後もクラス担任による面談や修学指導については、1年次生の早い時期から、学業やクラブ活動および大学生活全般に対する指導を継続していくことが必要である。

(4) フレッシュマンセミナー授業方法

檜垣 靖樹・山口 幸生

本セミナーは、学生自身が「如何に学び、社会に貢献するか」について自問自答ながら自学自習を実践し、スポーツ科学部生としての規範とスポーツ科学部で学ぶ専門領域を理解し、卒後の進路と目標を明確に示すことができるようになることを目的としている。

授業内容は、1) 田中守学部長による「スポーツ科学部生として、理論と実践が融合した文武合一のすすめ」、2) 体育学部一期生の水原博而氏による「体育学部の歴史からその伝統と誇り」、3) コンピテンシー診断テスト、4) 外部講師による文章力講座、5) 日本語力テスト、6) 本学知的財産センターの中川勝吾准教授による「スポーツと知財について」、7) 教育開発支援機構の須長一幸講師による「言葉の力」、8) スポーツ科学部全教員による専門性を生かした講義、9) スポーツ科学部全教員による1年次学生に対する個別の就学指導、などで構成されている。以下に、特筆すべき取り組みについて記載する。

コンピテンシー診断テストは、本学就職支援センターの協力を得て、テストの実施とその結果の解説を実施している。コンピテンシーとは、高い成果を生み出す人の特徴的な行動特性のことをいい、学生生活で身につけたい6つの力、要望に応える力、新しい価値を創る力、何かを変え

る力、きちんとやる力、自らを活かす力、互いを活かす力を評価し、解説を加えることで、学生への気づきを促している。

文章力講座は、平成 22 年度から中学・高校で国語教員を務めた退職教員に講師依頼し、作文を主な課題とした内容を実施している。この講座の狙いは、単に語彙を向上させることだけでなく、1) 読み手意識を持った文章が書ける、2) 自分をしっかり見つめた文章が書けるようになる、というものである。1 クラス 30 名（前半・後半）で、5 名の国語教師が担当し、課題作文の作成—作文指導と添削—課題作文の再提出といった流れで授業を進めている。受講した学生からの感想では、「文章力がついた」「書き方がわかった」「自分のためになった授業だった」「成長した気がする」など肯定的な評価が多数を占めている。特に受講生の 50-60%が「読み手意識を持った文章が書けるようになった」と回答している。

日本語力テストは、日本語の読む・書く・話す能力は「語彙の豊富さ」から推定可能である、という視点で旧メディア教育開発センターが開発したものを平成 18 年度より実施している。テストは 1 年生入学時（4 月）、1 年生フレッシュマンセミナー終了時（7 月）、および 1 年生 12 月の年 3 回の実施となっている。測定結果は、年に 2 回行われるクラス面談（各専任教員が 1 学年 12 名程度を担当）時に配布し、1 年生の基礎学力把握と学習指導の資料として有効に活用している。大学生の読書習慣低下やスマートフォンの普及による言葉の簡素化が、多くの専門家に指摘される場所である。これまでのところ、スポーツ科学部生の日本語力は、他学部生より低いことが判明してきている。

言葉の力プログラムは、1) グループで学習するための基本的なノウハウを身につけ、実践する、2) 論理的な文章の構造を把握し、実際にそうした文章の骨格を作る、をねらいとして展開している。テーマは、「部活動において厳しい上下関係は必要か」、「体罰について」など、身近な課題を用いている。具体的な例を掲げてディスカッションすることで議論の深まりが感じられ、関連する要因の可視化は論点の整理に有用と思われる。

(5) ステップアップセミナー授業法

坂本 道人

■ 本講座の背景

2015 年度の全国大卒求人倍率は、1.73 倍（前年度 1.61 倍 リクルートワークス研究所調べ）となっており、企業において採用意欲の高い状況が続いている。本学に寄せられた求人についても 6,606 件（前年度比 409 件増、6.6 ポイント増）、来学企業件数は 1,462 社（同 158 社増、12.1 ポイント増）で、5 年連続の増加となった。このような状況のなか本学部の就職率は、男子 97.2%、女子 98.5%、全体 97.6%であった。就職率だけをみると、就職状況は良好であるといえるが、今後、本学部が就職支援において目指すべきものは、学生個々の就職満足度の充実を図ることにあるといえよう。

■ 本講座のねらい

2015 年度の就職活動開始時期については、企業の広報活動日が 3 月 1 日以降という点は前年度と変わらないが、選考活動開始日については前年度よりも 2 ヶ月前倒しの 6 月 1 日以降に変更さ

れた。このような状況を受けて本講座は、学生がよりスムーズに充実した就職活動を展開できるよう、活動を開始する直前の2年次後期に開講されている。内容についても、本学部生に関係の深い職種や学生の要望に沿った講師の方々をお招きし、自身の体験談、社会の実情、現時点で身につけておくべきスキルなど様々な内容が盛り込まれている。また、今や就職試験や採用試験では一般的であるSPIの小テストを毎時間実施するなど、継続的に一般教養力を高めることも併せて取り組んでいる。このように、学生一人一人の就職活動に対する興味を促し、この時期に何を考え、何を準備しておくべきかを考えさせることが本講座のねらいである。

■ 今年度の新たな取り組み

今年度は、授業アンケートによる学生の意見や、前述した社会情勢などを考慮し、新たな工夫に取り組んだ。まず、昨年までの内容に加え、近年の公務員志望者の増加に伴い現役警察官による講義を取り入れた。続いて、元国際線CAの方をお招きし、企業面接や入社試験等に役立つとされるマナー講座を実施した。さらには、近年、文部科学省において大学教育を通じたジェネリックスキル育成への期待が高まっていることを受け、コンピテンシーテストとその後のフォローアップセミナーも併せて実施した。

■ 成果と課題について

これまでの本講座に対する学生の評価については、「警察官の話はとても自分のためになった」、「マナーの必要性を感じた」、「青年海外協力隊について興味を持った」など、興味・関心の高さが認められた。しかし、「留学や海外での活動についてもっと情報が欲しい」、「公務員の話をもっと聞きたい」、「現任教員の話を知りたい」など、新たな学生からの要望も示された。学生を取り巻く就職状況は前述のとおり毎年大きく変化している。本講座においても、それらの変化に対する迅速な対応が求められている。今後の本講座における課題については、就職進路支援センターが推奨するインターンシップ（就業体験プログラム）関係講座の積極的な導入や、本学の教育理念にもあるグローバル人材育成に即した、海外留学という選択肢の話題にも力を入れることが挙げられる。

(6) シラバス点検

田口 晴康

毎年、学部専任教員および非常勤講師から提出された次年度シラバスのすべてを対象に、1月中旬に教務委員を中心に内容の確認、点検作業を行っている。

平成28年度分は教務委員（米沢利広）、共通教育委員（森口哲史、坂本道人）、教職課程委員（柿山哲治）、FD・SD委員会委員（田口晴康、檜垣靖樹、藤井雅人、山口幸生）、学部事務室（山崎咲子）のメンバーで、1月12日（火）に行った。

確認のポイントは「概要の内容は十分か」「到達目標は明確に明記されているか」「成績評価基準及び方法は妥当か」「履修上の留意点は示されているか」「授業計画は15回の内容になっているか」「事前・事後学習（予習・復習）の記載は適切か」に則り行っており、適切な内容でないものについては、修正あるいは訂正がなされた。

シラバスの確認作業も6年目に入り、前年度から到達目標および評価基準の詳しい内容呈示、次年度より15回授業のより詳しい内容呈示が求められていることから、再度修正提出を依頼した教員もあったが、結果として全体が統一された内容になった。

(7) 学外研修参加

田口 晴康

学外研修については、毎年1月から2月に行われるスキー実習担当者の中から、大学体育連合冬期実技研修会および大学スキー指導者研修会(DSK)に参加している。

今年度は平成27年12月26日から3日間、岐阜県平湯温泉スキー場にて、田村雄志(助教)、橋本和俊(助教)、山崎郁美(助手)の3名が参加した。また、平成28年1月3日から4日間、長野県菅平高原スキー場にて、下園博信(教授)、森口哲史(准教授)の2名が参加した。それぞれの参加報告書については教授会でも報告され、実習中には他教員への伝達等が行われている。

(8) ワークショップ

田口 晴康

今年度の学部ワークショップとしては、「新コンピテンシーPROGを活用した「学生指導」セミナーの案内」と題し、平成28年1月14日(木)に学部会議室において、株式会社リアセックから担当者(田辺明博氏)に来てもらい実施した。参加者は専任教員および助手、助教合わせ35名が参加した(資料1)。

このプログラムは今年度から学部2年次の「ステップアップセミナー」の授業の中で行われている取り組みの一つで、学生個人のジェネリックスキル(コンピテンシー)を客観的に測定したうえで、複合的な評価とアクションプランの作成、実行を支援しようとする取り組みになっている。このことから、学部教員においてもこれらの内容をクラス面談時等に活用できるようになるためにも知っておく必要があることから開催した経緯がある。

(9) 授業アンケート(実施、報告書提出、まとめ、公開)

田口 晴康

平成27年度は前期7月6日、後期12月7日から各担当者による授業アンケートを実施した。

実施後は例年通り、業者による集計作業を依頼し、その集計結果から全教員へ配布するとともに、授業改善報告書作成依頼、報告書提出を行っている。因みに、報告書の提出率に関しては、26年度後期では専任教員、助教、助手合わせて35名「95%」、(非常勤講師8名)、27年度前期では専任教員、助教、助手合わせて58名「100%」、(非常勤講師18名)の提出率を示していた。

報告書提出後は、「専門講義科目」「専門実技科目」「生涯スポーツ演習」「生涯スポーツ論」の項目別に分類し、学部FD委員会がまとめたものを7月15日には「平成26年度後期授業改善

報告書のまとめ」として、平成 28 年 1 月 6 日には「27 年度前期授業改善報告書のまとめ」として教授会報告をしている。さらに、それぞれの授業アンケート集計結果を「生涯スポーツ演習」「生涯スポーツ論」「専門実技科目」「専門講義科目」（必修）「専門講義科目」（選択）「実験・実習・演習科目」「ゼミ演習科目」（後期のみ）の 7 分野に細分化し、その科目の平均点の公開を学部掲示板およびホームページ上にて行い（資料 2-1、2-2）、学部事務室にて各教員の個別結果の公表も行っている。

授業改善報告書については 23 年度から開始し、27 年度で前・後期合わせ 5 年目を迎えるが、今回も全教員の改善努力、さらなる授業改善に努めている様子がうかがえた。

報告書の記述内容については、「講義科目」で、映像、配布資料等、教材の様々な工夫、ミニッツペーパーの効果的な活用、アクティブラーニングなどの双方向の授業展開への意識などの記述が多く、消極的な学生に対する対応策の記述も見られた。一方、今回も受講態度（携帯、私語、居眠り、飲食）の問題についての記述も見られ、特に授業中のスマートフォン使用に関しては依然として課題に挙げられる。

「専門実技科目」では、全体的に学生の反応、評価とも高く、シラバスに記されている達成度について概ね達成できたという報告が多い。一方、理解度の差や個人差、基礎的な動きの必要性や技術習得に対する頑張りが足りないなどの記述も見られた。

「生涯スポーツ演習」では、多くの教員が前回の反省をもとに改善した効果について語られていた。一方、積極性に欠ける学生の指摘や取り組みに関する今後の工夫も見られていた。また、今年度から生涯スポーツ演習 I の授業内容（アクアが今年度から 3 回）の変更を行ったことから意図的にアクアで 3 回休む学生が増えたとの指摘もあった。

新コンピテンシーテストPROGを活用した「学生指導」セミナー

学生の強み・弱みを発見し、さらに伸ばす指導を考える

- 1)新しいコンピテンシーテストPROGの概要を理解し、学生と共通の話ができる！
- 2)先生方の見立てた学生の強み・弱みを、客観的データで見つめ直せる！
- 3)学生の強みを承認し、自信を持たせることで、さらなる好成績を残せる！

<測定している能力> ※今回は、赤字のコンピテンシーのみを測定しています。

Literacy

現実場面で知識を活用する力
「リテラシー」を問題解決のプロセス
に即して客観的に測定します。

情報収集力
課題発見力
情報分析力
構想力



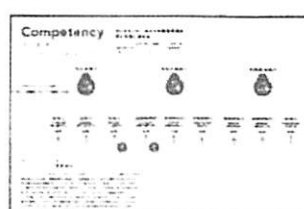
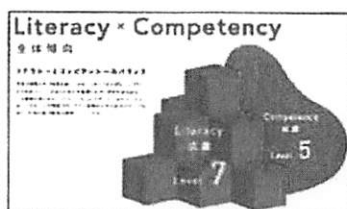
Competency

自分を取巻く環境に実践的に働きかけ対処する力
「コンピテンシー」を社会で活躍する社会人の
実証データに基づいて客観的に測定します。

対人基礎力
対自己基礎力
対課題基礎力

学生の「強みを認める」ことで自信が付き、 学生が主体的に目標を追う行動に出ます。

<学生に配布される資料一式>



セミナー実施要項

日時: 1月14日(木) 16:30-17:30

場所: 会議室

★ご希望の方には、無料でテストを受験いただけます。ご相談ください。 担当/田口

資料 2-1

平成26年度後期スポーツ科学部授業アンケート集計結果について(お知らせ)

結果 1.生涯スポーツ演習(スポーツ科学部以外)

【対象科目数: 151 アンケート実施科目数: 151】

履修登録数: 4,143名 アンケート実施対象者数: 4,143名 回答者数: 3,418名
 回答率: 82.5%

質問項目	平均
A-1 授業は興味や関心を引くものだった	4.3
A-2 授業は理解しやすかった	4.4
A-3 教師の熱意を感じた	4.5
A-4 教師の話し方や声は聞き取りやすかった	4.5
A-5 教材(教科書・資料・実習教材など)は適切だった	4.1
A-6 教師の学生に対する態度は適切だった	4.5
A-7 授業の開始時間、終了時間が守られていた	4.4
A-8 学習する雰囲気を作る行動に対して、適切な対応が行われていた	4.3
A-9 授業の目標に到達するに適した内容であった	4.4
A-10 この授業に満足している	4.5

結果 2.生涯スポーツ論(スポーツ科学部以外)

【対象科目数: 12 アンケート実施科目数: 12】

履修登録者数: 1,547名 アンケート実施対象者数: 1,547名 回答者数: 992名
 回答率: 63.5%

質問項目	平均
A-1 授業は興味や関心を引くものだった	3.7
A-2 授業は理解しやすかった	3.7
A-3 教師の熱意を感じた	3.9
A-4 教師の話し方や声は聞き取りやすかった	4.0
A-5 教材(教科書・資料・実習教材など)は適切だった	3.9
A-6 教師の学生に対する態度は適切だった	3.7
A-7 授業の開始時間、終了時間が守られていた	3.9
A-8 学習する雰囲気を作る行動に対して、適切な対応が行われていた	4.1
A-9 この授業に満足している	3.8
A-10 授業の目標に到達するに適した内容であった	3.7

結果 3.専門実技科目(レクリエーション演習、生涯スポーツ演習Ⅰ～Ⅳを含む)

【対象科目数: 47 アンケート実施科目数: 46】

履修登録数: 2,252名 アンケート実施対象者数: 2,250名 回答者数: 1,744名
 回答率: 77.5%

質問項目	平均
A-1 授業は興味や関心を引くものだった	4.2
A-2 授業は理解しやすかった	4.2
A-3 教師の熱意を感じた	4.3
A-4 教師の話し方や声は聞き取りやすかった	4.3
A-5 教材(教科書・資料・実習教材など)は適切だった	4.0
A-6 教師の学生に対する態度は適切だった	4.2
A-7 授業の開始時間、終了時間が守られていた	4.2
A-8 学習する雰囲気を作る行動に対して、適切な対応が行われていた	4.2
A-9 授業の目標に到達するに適した内容であった	4.2
A-10 この授業に満足している	4.2

結果 4.専門講義科目(必修)

【対象科目数: 10 アンケート実施科目数: 9】

履修登録数: 2,029名 アンケート実施対象者数: 2,024名 回答者数: 1,487名
 回答率: 73.5%

質問項目	平均
A-1 授業は興味や関心を引くものだった	3.6
A-2 授業は理解しやすかった	3.5
A-3 教師の熱意を感じた	3.8
A-4 教師の話し方や声は聞き取りやすかった	3.7
A-5 板書や視覚機器(プロジェクターなど)の使用は適切だった	3.8
A-6 教材(教科書・資料・実習教材など)は適切だった	3.7
A-7 教師の学生に対する態度は適切だった	3.8
A-8 授業の開始時間、終了時間が守られていた	3.8
A-9 学習する雰囲気を作る行動に対して、適切な対応が行われていた	3.7
A-10 この授業に満足している	3.6
A-11 授業の目標に到達するに適した内容であった	3.7

結果 5.専門講義科目(選択)

【対象科目数: 27 アンケート実施科目数: 23】

履修登録数: 2,818名 アンケート実施対象者数: ####名 回答者数: 1,653名
 回答率: 65.7%

質問項目	平均
A-1 授業は興味や関心を引くものだった	3.8
A-2 授業は理解しやすかった	3.8
A-3 教師の熱意を感じた	4.0
A-4 教師の話し方や声は聞き取りやすかった	4.0
A-5 板書や視覚機器(プロジェクターなど)の使用は適切だった	3.8
A-6 教材(教科書・資料・実習教材など)は適切だった	3.8
A-7 教師の学生に対する態度は適切だった	3.9
A-8 授業の開始時間、終了時間が守られていた	4.0
A-9 学習する雰囲気を作る行動に対して、適切な対応が行われていた	3.9
A-10 この授業に満足している	3.9
A-11 授業の目標に到達するに適した内容であった	3.9

結果 6.実験、実習、演習科目(心理学、生理学、運動学、社会調査、情報処理、健康スポーツ)

【対象科目数: 9 アンケート実施科目数: 9】

履修登録数: 809名 アンケート実施対象者数: 748名 回答者数: 590名
 回答率: 74.9%

質問項目	平均
A-1 授業は興味や関心を引くものだった	3.9
A-2 授業は理解しやすかった	3.7
A-3 教師の熱意を感じた	4.0
A-4 教師の話し方や声は聞き取りやすかった	4.0
A-5 教材(教科書・資料・実習教材など)は適切だった	3.8
A-6 教師の学生に対する態度は適切だった	3.8
A-7 授業の開始時間、終了時間が守られていた	4.0
A-8 学習する雰囲気を作る行動に対して、適切な対応が行われていた	4.0
A-9 授業の目標に到達するに適した内容であった	4.0
A-10 この授業に満足している	3.9

結果 7.スポーツ科学演習・卒業研究論文

【対象科目数: 50 アンケート実施科目数: 37】

履修登録数: 594名 アンケート実施対象者数: 453名 回答者数: 406名
 回答率: 89.6%

質問項目	平均
A-1 授業は興味や関心を引くものだった	3.8
A-2 授業は理解しやすかった	3.8
A-3 教師の熱意を感じた	4.0
A-4 教師の話し方や声は聞き取りやすかった	4.0
A-5 板書や視覚機器(プロジェクターなど)の使用は適切だった	3.8
A-6 教材(教科書・資料・実習教材など)は適切だった	3.8
A-7 教師の学生に対する態度は適切だった	3.9
A-8 授業の開始時間、終了時間が守られていた	4.0
A-9 学習する雰囲気を作る行動に対して、適切な対応が行われていた	3.9
A-10 この授業に満足している	3.9
A-11 授業の目標に到達するに適した内容であった	3.9

< 参考 >

評価(5段階)

全く当てはまらない	あまり当てはまらない	どちらでもない	やや当てはまる	とても当てはまる
1	2	3	4	5

以上

資料 2-2

平成27年度前期スポーツ科学部授業アンケート集計結果について(お知らせ)

結果 1.生涯スポーツ演習(スポーツ科学部以外)

【対象科目数: 147 アンケート実施科目数: 139】

履修登録数: 4,220名 アンケート実施対象者数: 4,004名 回答者数: 3,425名
回答率: 85.5%

質問項目	平均
A-1 授業は興味や関心を引くものだった	4.4
A-2 授業は理解しやすかった	4.5
A-3 教師の熱意を感じた	4.5
A-4 教師の話し方や声は聞き取りやすかった	4.6
A-5 教材(教科書・資料・実習教材など)は適切だった	4.2
A-6 教師の学生に対する態度は適切だった	4.6
A-7 授業の開始時間、終了時間が守られていた	4.5
A-8 学習する雰囲気や妨げる行動に対して、適切な対応が行われていた	4.4
A-9 授業の目標に到達するに適した内容であった	4.5
A-10 この授業に満足している	4.6

結果 4.専門講義科目(必修)

【対象科目数: 12 アンケート実施科目数: 10】

履修登録数: 2,219名 アンケート実施対象者数: #####名 回答者数: 1,397名
回答率: 72.3%

質問項目	平均
A-1 授業は興味や関心を引くものだった	3.8
A-2 授業は理解しやすかった	3.8
A-3 教師の熱意を感じた	4.0
A-4 教師の話し方や声は聞き取りやすかった	4.0
A-5 板書や視聴覚機器(プロジェクターなど)の使用は適切だった	4.0
A-6 教材(教科書・資料・実習教材など)は適切だった	3.9
A-7 教師の学生に対する態度は適切だった	4.0
A-8 授業の開始時間、終了時間が守られていた	4.1
A-9 学習する雰囲気や妨げる行動に対して、適切な対応が行われていた	4.1
A-10 この授業に満足している	3.8
A-11 授業の目標に到達するに適した内容であった	3.9

結果 2.生涯スポーツ論(スポーツ科学部以外)

【対象科目数: 13 アンケート実施科目数: 13】

履修登録者数: 1,640名 アンケート実施対象者数: 1,640名 回答者数: 1,147名
回答率: 69.9%

質問項目	平均
A-1 授業は興味や関心を引くものだった	3.5
A-2 授業は理解しやすかった	3.6
A-3 教師の熱意を感じた	3.7
A-4 教師の話し方や声は聞き取りやすかった	3.7
A-5 板書や視聴覚機器(プロジェクターなど)の使用は適切だった	3.7
A-6 教材(教科書・資料・実習教材など)は適切だった	3.7
A-7 教師の学生に対する態度は適切だった	3.8
A-8 授業の開始時間、終了時間が守られていた	4.0
A-9 学習する雰囲気や妨げる行動に対して、適切な対応が行われていた	3.6
A-10 この授業に満足している	3.6
A-11 授業の目標に到達するに適した内容であった	3.7

結果 5.専門講義科目(選択)

【対象科目数: 36 アンケート実施科目数: 36】

履修登録数: 4,374名 アンケート実施対象者数: #####名 回答者数: 3,250名
回答率: 74.3%

質問項目	平均
A-1 授業は興味や関心を引くものだった	4.0
A-2 授業は理解しやすかった	4.0
A-3 教師の熱意を感じた	4.1
A-4 教師の話し方や声は聞き取りやすかった	4.1
A-5 板書や視聴覚機器(プロジェクターなど)の使用は適切だった	4.1
A-6 教材(教科書・資料・実習教材など)は適切だった	4.0
A-7 教師の学生に対する態度は適切だった	4.1
A-8 授業の開始時間、終了時間が守られていた	4.2
A-9 学習する雰囲気や妨げる行動に対して、適切な対応が行われていた	4.1
A-10 この授業に満足している	4.0
A-11 授業の目標に到達するに適した内容であった	4.1

結果 3.専門実技科目(レクリエーション演習、生涯スポーツ演習Ⅰ～Ⅳを含む)

【対象科目数: 72 アンケート実施科目数: 68】

履修登録数: 2,992名 アンケート実施対象者数: 2,791名 回答者数: 2,303名
回答率: 82.5%

質問項目	平均
A-1 授業は興味や関心を引くものだった	4.3
A-2 授業は理解しやすかった	4.3
A-3 教師の熱意を感じた	4.5
A-4 教師の話し方や声は聞き取りやすかった	4.4
A-5 教材(教科書・資料・実習教材など)は適切だった	4.2
A-6 教師の学生に対する態度は適切だった	4.4
A-7 授業の開始時間、終了時間が守られていた	4.4
A-8 学習する雰囲気や妨げる行動に対して、適切な対応が行われていた	4.3
A-9 授業の目標に到達するに適した内容であった	4.4
A-10 この授業に満足している	4.4

結果 6.実験、実習、演習科目(心理学、生理学、運動学、社会調査、情報処理、健康スポーツ)

【対象科目数: 4 アンケート実施科目数: 4】

履修登録数: 267名 アンケート実施対象者数: 267名 回答者数: 194名
回答率: 72.7%

質問項目	平均
A-1 授業は興味や関心を引くものだった	3.9
A-2 授業は理解しやすかった	3.8
A-3 教師の熱意を感じた	3.9
A-4 教師の話し方や声は聞き取りやすかった	4.0
A-5 板書や視聴覚機器(プロジェクターなど)の使用は適切だった	4.0
A-6 教材(教科書・資料・実習教材など)は適切だった	3.9
A-7 教師の学生に対する態度は適切だった	4.0
A-8 授業の開始時間、終了時間が守られていた	4.0
A-9 学習する雰囲気や妨げる行動に対して、適切な対応が行われていた	3.9
A-10 この授業に満足している	3.9
A-11 授業の目標に到達するに適した内容であった	4.0

< 参 考 >

評価(5段階)

全く当てはまらない	あまり当てはまらない	どちらでもない	やや当てはまる	とても当てはまる
1	2	3	4	5

以上

6 地域連携・社会貢献・広報推進

乾 真寛・野口 安忠

■ 地域連携

地域との連携において、近年スポーツ科学部は、極めて大きな役割を果たしてきていると言える。エクステンションセンターが開講するキッズ・スポーツ講座は、年々その内容も充実しており、地域の子供たちにとってスポーツとの出会いの場や機会を提供している。また、社会人や高齢者向けの健康教室も関心が高く、女性のための元気健康体操教室やホノルルマラソンを完走しようなど、サクセスフルエイジングに大きく貢献している。

<キッズ・スポーツ教室> ◇前期開催...キッズ体操教室 (39名)、キッズ・ラグビーフットボール (11名)、キッズサッカークラブ (121名)、キッズバレーボール教室 (29名)、キッズバスケットボール教室 (14名) 合計5教室 213名。後期開催...キッズ体操教室 (37名)、キッズ陸上教室 (86名) 合計2教室 124名

<小学校授業支援> ◇三筑小学校 (ボール運動・ダンス)、東住吉小学校 (スノーケリング・水泳)、舞鶴小学校 (サッカー)、那珂小学校 (サッカー)、横手小学校 (サッカー)、舞鶴小学校 (サッカー、コーディネーショントレーニング)

地域ネット推進センターの事業としては、福岡市との連携協定に基づく「アイランドシティにおける健康まちづくり」や「小学校の体育授業サポート事業」が高く評価され、福岡大学が有するオリジナルなノウハウが地域コミュニティや学校教育現場で活用され、大きな成果を収めつつある。



「小学校の体育授業サポート事業」の様子

■ 社会貢献

東京五輪 2020 を契機としたオリンピックムーブメントのひとつとして学生主体で企画・運営 (学生チャレンジプロジェクト採用) された“七福五輪”大運動会は、開かれた大学を目指す福岡大学キャンパスに、地域住民と教職員・学生が一体となったイベントとして開催された。



七福五輪大運動会ポスター (左)、プロジェクトメンバー (中央)、当日の様子 (右)

また、JICA と大学の連携協定に基づく南米ボリビアへの短期ボランティア派遣（野球部 8 名、サッカー 6 名）が 2015 年度より始動し、5 年間継続されることになった。グローバルな人材育成が叫ばれる中で、スポーツ科学部生が国際社会で社会貢献する事業が実施されたことの意義や成果は、注目すべきことである。



JICA 連携協定調印式（左）、ボリビアにて野球指導（中央）、ボリビアにてサッカー指導（右）

■ 広報推進

スポーツ科学部独自の情報発信を目指して、学部ホームページの刷新が年次的に進められてきた。まだまだ、改善の余地を残しているが、学部行事の紹介やスポーツ大会における本学部生たちの活躍をリアルタイムで発信する試みが進められている。テレビ放映において、(BS 日テレ アスリートの輝石「永井謙佑選手(名古屋グランパスエイト)」、NHK 総合 ニュース 7 「課外教育プログラム野外キャンプ」、NHK 総合 ためしてガッテン「田中宏暁教授のスロージョギング」、RKB 今日感ニュース「砲丸投げ日本一の女子大生・大田亜矢選手、野口安忠コーチ」)などが放送された。全学ホームページでの文化・スポーツ関連記事の掲載回数(試合結果)や関心度(リオデジャネイロ五輪選考年度)が高いこともあり、今後、更なる広報体制の充実が必要であると考えられる(下表・図参照)。

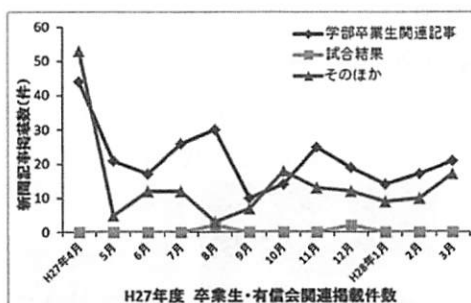
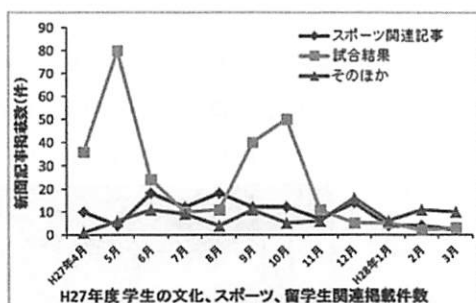


本学部ホームページ

全学ホームページアクセス状況から主な本学部公開ニュースを抜粋(福岡大学広報課管理データより)

公開日	スポーツ科学部公開ニュース	ページビュー数*
2015/5/8	九州六大学野球伝統の一戦「福西戦」が行われます	1,335(480)
2015/7/30	本学卒業生 2 人がサッカー日本代表に選出されました	1,073(477)
2015/11/21	福岡大学大運動会「七福五輪」熱戦中	910(289)
2016/2/1	バレーボール部の 4 人が Vリーグ入団記者会見を行いました	783(263)
2016/2/18	【テレビ放映のお知らせ】NHK「ためしてガッテン」にスポーツ科学部の田中宏暁教授が出演します	760(349)

*()内スマートフォンでのページビュー数



平成 27 年度 新聞*記事掲載件数推移(福岡大学広報課管理データより)

* 取扱新聞社(西日本新聞、朝日新聞、毎日新聞、読売新聞、日経新聞、西日本スポーツ新聞、その他より)

7 国際交流、高大連携

村上 純・小牟礼 育夫

■ 国際交流

今年度も、競技系スポーツの国際交流と連携、健康運動に関する教育および研究分野での連携、レクリエーション等による学生間交流ならびに教職員との交流ができた。

【スポーツ交流】

競技系スポーツにおいて、国際的な競技会への出場、トレーニング交流、指導者交流が行われた。また、今年度も学部独自の海外研修制度であるピークパフォーマンス演習Ⅱで9名の学生が海外で学んだ。

【研究推進】

健康科学における運動生理学、スポーツ科学におけるコーチング学の分野をはじめ多くの分野で、国際的な共同研究、国際学会での発表、研究成果の国際学会誌掲載がなされた。また、米国から講師を招聘し、野外教育国際ワークショップも行われ、多くの学生がアクティビティを通じて学んだ。さらに、学部教員1名が英語による授業開講のための研修を米国の大学にて行った。

【学生間交流・研修】

情宣活動の結果、多くの学生が海外での学びに興味を示すようになり、今年度は、9名が海外で研修を行い、1名が留学した。また、交換留学生として、台湾から1名の学生を受け入れた。さらに、JICAとの連携で多くの学生（サッカー8名、野球7名）が、ボランティアとして海外で活動した。

次年度は、より多くの種目で、競技系スポーツの国際交流ができるよう進めていきたい。また、国外の大学や学部、研究機関との連携および共同研究を進めていくとともに、国際的な学会誌への掲載、発表、招待講演等を増やしていく。さらに、学内関係機関との連携を密にし、語学研修、海外研修、留学を情宣し、多くの学生が海外で学ぶ機会をつくるとともに、留学生の受け入れを行いたい。また、今年度新たに実施したボランティアの海外派遣についてJICAとの連携を強め、より多くの学生が海外で活動する機会をつくるよう努力していきたい。

■ 高大連携

高大連携事業は、進学体育コースがある福大付属若葉高校、スポーツコミュニケーションコースのある福岡県立早良高校と行われている。

【福大付属若葉高校】

付属高校であるため進学体育コースの教員と合同会議を行い、連携事業について話し合った。今年度は、第二記念堂を使用した体育祭の支援、ゴルフ授業への支援などを行った。

【福岡県立早良高校】

今年度は、担当高校教員の異動などにより具体的な活動は行われていなかったが、6月16日に早良高校から本学部へ電話連絡があり、以下の内容によって今年度の連携事業を実施したいとの要望があった。

(1) 早良高校スポーツコミュニケーションコース2年次生を対象とした学内見学

2年次生27名を対象とした福岡大学見学と学食の利用を実施することで、進学に向けたモチベーションの向上をねらいたいとのこと。また、第二記念会堂を中心とした体育スポーツ施設の見学及び実技種目の見学を希望される。時期的には、後期の実施になる見込みである。

(2) 早良高校内での授業提供

一昨年実施した本学学生による保健の授業提供、コミュニケーション能力向上のためのレクリエーション授業の提供を求められる。この件に関しては、保健体育教員コース及び生涯スポーツ教育コース学生を活用しながら「本学学生の指導力向上の機会」と位置づけ展開する必要があるものとする。

(3) 運動部活動との連携

運動部活動における連携の要望も示される。具体的には、高校内での部活動に対する本学学生の指導と本学の部活動練習への高校生参加の2種類があるものと考えられる。

前者の部活動指導に関しては、今後コーチ法演習の単位認定等にも関わることが考えられるため教務担当者の参画が求められ、後者運動部活動への高校生の参加に関しては学生担当者の参画が必要と考えられる。

以上の要望を受け止めながら、あくまでも本学学生の教育の場として活用する方策を考え、学部の魅力につながることを検討する必要があるものとする。

8 教職課程

柿山 哲治

■ 教職課程登録者数

学部	学科	15台	14台	13台	12台	11台以前	合計
スポーツ科	スポーツ科	194	161	134	100	1	590
	健康運動科	49	44	40	44	0	177
合計		243	205	174	144	1	767

■ 社会教育主事課程科目登録者数

学部	学科	15台	14台	13台	12台	11台以前	合計
スポーツ科	スポーツ科	0	0	1	2	0	3
	健康運動科	0	0	2	0	0	2
合計		0	0	3	2	0	5

■ 教員免許状取得状況

学部	学科	卒業生	免許状取得者数	免許状取得率
スポーツ科	スポーツ科	192	80	41.7%
	健康運動科	77	42	54.5%
合計		269	122	45.4%

■ 教員免許状（一種）一括申請者数

学部	学科	申請者数	中一種	高一種	申請件数
			保健体育	保健体育	
スポーツ科	スポーツ科	80	69	80	149
	健康運動科	42	34	41	75
科目等履修生（含大学院生）		7	6	7	13
合計		129	109	128	237

■ 教員免許状更新講座

実施期間：2015年8月10日（月）～12日（水）、受講者：16名

講習科目名：『学校に求められる保健体育のあり方』

「現代の子どもの健康に関する課題と指導のあり方」（柿山哲治）

「ダンス指導のあり方」（柿本真弓）

「現代の子どものメンタルヘルスと運動・スポーツの役割」（山口幸生）

「バレーボール指導のあり方」（米沢利広）

「学校体育の役割」(深江久嗣)、「柔道指導のあり方」(坂本道人)

■ 教員採用試験合格者数

4名(含大学院生)

内訳：広島県中学校1名、佐賀県高等学校1名、
福岡市中学校1名、福岡県高等学校(院生)1名

9 研究科教育活動状況

青柳 領・檜垣 靖樹

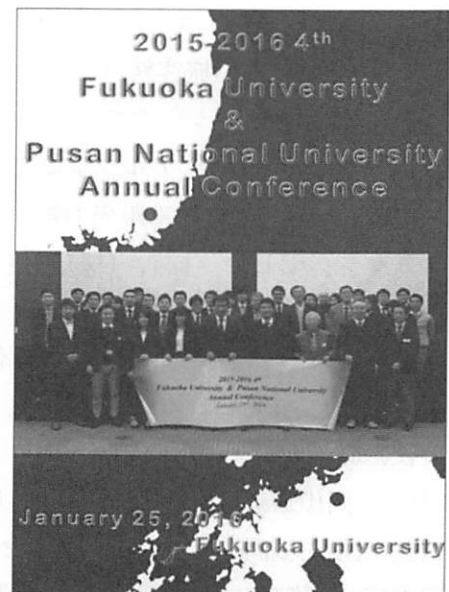
まず、スポーツ健康科学研究科博士課程後期では、前期日程で八板昭仁氏（課程博士，論題：バスケットボールの状況判断能力），平野雅巳氏（課程博士，特異的な発揮筋力を刺激として有酸素性運動に関する研究），森村和浩氏（論文博士，有酸素能の向上を意図した至適運動プログラムと心身の健康に関する研究），後期日程では明石光史氏（課程博士，ボディコンタクトによる筋力発揮が混戦型球技種目選手の無酸素性パワーの間欠的発揮能力に及ぼす影響）の4名が学位審査の最終試験に合格し，各々博士の学位を取得した．例年，1～2名程度の取得者であることを考えると本年度は多くの者が取得したと考えることができる．指導の労を執られた田中宏暁，檜垣靖樹両教授，また，退職されるまでご指導いただいた進藤宗洋，清永明名誉教授に感謝申し上げたい．さらに，この最終審査には2名の学外者（筑波大学會田宏教授，同志社大学石井好二郎教授）が審査に加わり，第三者による評価が定着しつつあると考えられる．

前期課程では，8月に中間報告会，2月に修士論文発表会が開催され，各々17名が研究成果を発表し，最終試験に合格した．その中では16名が学術学会等で修士論文の一部を発表し，第三者による評価を受けている．また，修了者の中には2名の早期修了者が含まれており，2011年度より採用された早期履修・早期修了の成果があがっていると考えられる．

国際交流に関しては，釜山国立大学スポーツ科学研究科との学術交流会が会場を隔年ごとに持ち回ることにより行われている．しかしながら，本年度は当初予定の11月は先方の突然の学長交代およびその選挙のために延期となり，延期となった1月も未曾有の大雪のため交通機関が機能せず，結局，釜山大学と合同での開催はかなわなかった．しかし，本学関係者のみで，従前通り，英語による研究発表が Mr. Sugi, Mr. Goto, Ms.

Yamamoto, Ms. Morita の4名の博士課程前期の者により行われた．同時に，Dr. Mukaino による The M-Test and its applications in sports の講演も同時に行われた．

また，この釜山国立大学との学術交流を前提した授業として「国際学会発表スキル特論」が用意され，従来は若く，国際学会での発表経験の豊富な助教が担当していたが，他大学への移動に伴い，新たに専任教員の山口幸生・布目寛幸両教授に担当してもらうこととなった．大学院生の英文作成のみならず，英語会話能力の向上，プレゼン力の向上に大きな期待をしたい．さらには，この試みを踏み台に大学院生の国際学会での発表を拡大していく布石になってもらいたいと願っている．



(学術交流会報告書表紙)

10 就職・進路

(1) スポーツ科学部

柿本 真弓

平成 27 年度、本学に寄せられた求人は 6,606 件（前年度比 409 件増 6.6%増）、来学企業件数は、1,462 社（同、158 社増 12.1%増）で、5 年連続の増加となった。求人件数を業種別でみると、最も多かったのがサービス業（3,086 件 46.7%）で、次いで卸売・小売業（1,425 件 21.6%）、製造業（865 件 13.1%）、建設業（674 件 10.3%）となっており、地域別でみると、福岡を含む九州圏内の求人が最も多く（2,405 件 36.4%）、関東地区に本社のある企業からの求人（2,190 件 33.2%）も多かった。

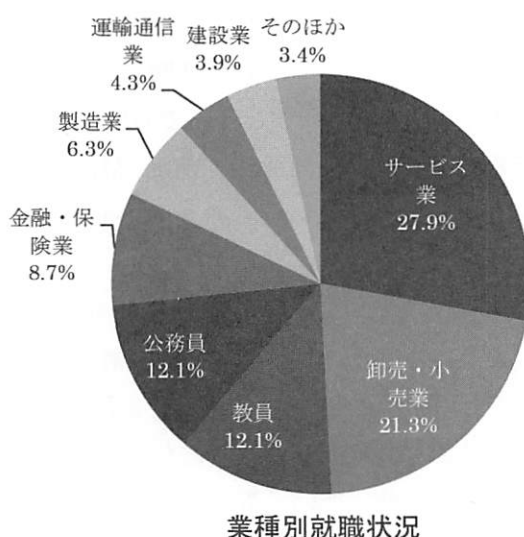
平成 26 年度は、企業の広報活動・選考活動の開始時期が 12 月 1 日以降、選考活動開始日が 4 月 1 日以降であったが、平成 27 年度は、学修時間の確保と留学など多様化する学生への対応として、企業の広報活動開始日が 3 月 1 日以降、選考活動開始日が 8 月 1 日以降と後ろ倒しされた。

これにより、活動のタイミングに苦慮する学生も見られたが、就職・進路支援センターでは、自己分析を円滑に進めるための支援、模擬面接など集団・個人面接への対応、インターンシップの情報提供など、あらゆる角度から、学生が有意義な就職活動を行えるよう支援してきた。その結果、全学的には就職率が 96.2%（前年度より 2.0%増）となった。スポーツ科学部においては、全体的には 97.6%（男子 97.2%・女子 98.5%）であった。その内訳は、サービス業 27.9%、卸売業・小売業 21.3%、教員 12.1%、公務員 12.1%、金融・保険業 8.7%、製造業 6.3%、運輸通信業 4.3%、建設業 3.9%、その他 3.4%であった。

主な就職先は以下のとおりであった。

(株) 戸高鋳業社、積水ハイム東海 (株)、久光製薬 (株)、フンドーキン醤油 (株)、安川エンジニアリング (株)、(株) エイチ・アイ・エス、ANA 福岡空港 (株)、九州旅客鉄道 (株)、西日本旅客鉄道 (株)、博運社、アシックスジャパン (株)、トヨタカローラ山口 (株)、アルファコミュニケーションズ (株)、九州三菱自動車販売 (株)、(株) 翔葉、(株) スズケン、ゼビオ (株)、(株) ダリア、(株) ナイキジャパン、南国殖産 (株)、(株) ヤナセ、リコージャパン (株)、(株) 西京銀行、(株) 佐賀銀行、(株)

十八銀行、(株) 西日本シティ銀行、(株) 福岡銀行、大同火災海上保険 (株)、日本生命保険相互会社、明治安田生命保険相互会社、(株) 未来都市開発、アイ・ケイ・ケイ (株)、ALSOK 福岡 (株)、岡山放送 (株)、公益財団法人熊本 YMCA、(株) ディアーズ・ブレイン、(株) トライル、公益財団法人福岡県スポーツ振興センター、リーフラス (株)、熊本県警、長崎県警、福岡県警、警視庁、刑務官、自衛隊一般曹候補生、福岡市消防局、佐賀県教員 (高校)、広島県教員 (中学校)、福岡市教員 (中学校) など



業種別就職状況

主な就職先は、以下のとおりであった。

福岡県立スポーツ科学情報センター嘱託職員、東福岡高等学校寮監、福岡県高等学校常勤講師、ヴィクラーレ沖縄 FC、ハートフルアソシエイト、福岡市立障がい者スポーツセンター、福岡大学筑紫病院、東福岡高校寮職員、西日本短期大学助教、山口県高等学校常勤講師、中村学園大学非常勤助手、大阪経済大学専任教員

また、卒業生のうちの2名は、福岡大学大学院博士課程後期へ進学した。

11 外部獲得資金実績

布目 寛幸

科学研究費 (H26 年度)

研究種目	代表者名	研究課題	金額
基盤研究(A)	田中 宏暁	健康寿命延伸と介護予防に寄与する運動プロトコルの開発とシステム構築	¥7,900,000
基盤研究(C)	布目 寛幸	サッカーにおける鼠径部障害発生メカニズムの解明	¥1,311,720
基盤研究(C)	柿山 哲治	女子バスケットボール創成の解明	¥1,200,000
挑戦的萌芽研究	檜垣 靖樹	筋収縮刺激による培養筋細胞を用いたミトコンドリア遊走機構の解明	¥1,500,000
若手研究(B)	平野 雅巳	発揮筋力を調整した一過性有酸素性運動の作業筋負荷が遺伝子発現を高める可能性の検討	¥1,900,000
研究活動スタート支援	泉原 嘉郎	小学生年代におけるコーディネーションテストの開発及びコーディネーション能力の調査	¥1,000,000
研究活動スタート支援	池永 昌弘	サルコペニア高齢者の骨格筋毎の容積特性ならびに有酸素運動による適応効果の検証	¥1,100,000

科学研究費 (H27 年度)

研究種目	代表者名	研究課題	金額
基盤研究(A)	田中 宏暁	健康寿命延伸と介護予防に寄与する運動プロトコルの開発とシステム構築	¥6,100,000
基盤研究(B)	檜垣 靖樹	エピジェネティック修飾を介する骨格筋糖代謝の分子適応機構の解明	¥4,000,000
基盤研究(C)	柿山 哲治	女子バスケットボール創成の解明	¥1,200,000
基盤研究(C)	川中 健太郎	不活動が骨格筋インスリン抵抗性を引き起こす機序	¥1,000,000
基盤研究(C)	上原 吉就	HDL新生作用をもつ次世代型遺伝子導入ペプチドの開発と臨床応用	¥1,200,000
挑戦的萌芽研究	檜垣 靖樹	骨格筋細胞における核とミトコンドリアの共遊走機構の解明	¥1,400,000
若手研究(B)	森村 和浩	子どもの身心の健やかな成長に資する最適な運動条件の探索	¥1,900,000
研究活動スタート支援	栗田 昇平	体育授業における効果的な話し合い活動の在り方	¥1,200,000
研究活動スタート支援	池永 昌弘	サルコペニア高齢者の骨格筋毎の容積特性ならびに有酸素運動による適応効果の検証	¥900,000

受託研究 (H26 年度)

依頼者	研究代表者	研究課題	金額
(財)福岡県産業・科学技術振興財団	田中 宏暁	オーダーメイド運動支援システムの開発	¥5,971,889
中村学園大学	田中 宏暁	メタボリック症候群の個々人に最適な運動処方指導する運動アドバイスシートの開発	¥30,000
福岡安全センター(株)	田中 宏暁	にこにこステップ運動にかかわる新規ノウハウの研究開発	¥900,000
特定非営利活動法人 豊栄加齢研究所	田中 宏暁	医療費抑制効果検証研究業務等における運動処方箋作成	¥72,000
特定非営利活動法人 豊栄加齢研究所	田中 宏暁	医療費抑制効果検証研究業務	¥36,000
竹井機器工業(株)	田中 宏暁	自転車エルゴメーターによるVO2max測定評価	¥183,051
日田市長	田中 宏暁	健康づくり効果検証事業・国民健康保険ステップ運動教室	¥4,641,000
柳井市長	田中 宏暁	柳井市運動による健康づくり業務	¥3,780,000

(株)ツインズ	田中 宏暁	結ばない靴紐の有効性に関する研究	¥627,000
メロディアン(株)	檜垣 靖樹	水素水の運動への効果確認研究	¥3,000,000
春日市立天神山小学校	山口 幸生	児童の体力と心理社会的要因の関連性	¥151,200
(株)アサヒコーポレーション	清永 明	スポーツ科学に基づく、近未来志向の総合的シューズの研究開発	¥2,700,000

受託研究 (H27 年度)

依頼者	研究代表者	研究課題	金額
福岡安全センター(株)	田中 宏暁	にこにこステップ運動にかかわる新規ノウハウの研究開発	¥900,000
日田市長	田中 宏暁	健康づくり効果検証事業・国民健康保険 ステップ運動教室	¥4,641,000
柳井市長	田中 宏暁	柳井市運動による健康づくり業務	¥5,400,000
中村学園大学	田中 宏暁	メタボリック症候群の個々人に最適な運動処方を指導する運動アドバイスシートの開発	¥30,000
花王(株)	田中 宏暁	茶カテキン含有飲料のエネルギー消費量への影響確認試験	¥4,000,000
春日市立天神山小学校	山口 幸生	児童の体力と心理社会的要因の関連性	¥151,200

研究助成寄付金 (H26 年度)

寄付者	研究代表者	研究課題	金額
(株)ピースフル・ハート	田中 宏暁	研究助成	¥300,000
田中 宏暁	田中 宏暁	研究助成寄附	¥1,200,000
サントリーウエルネス(株)	田中 宏暁	運動と疾患予防に関する研究助成のため	¥1,000,000
サントリーグローバルイノベーションセンター(株)	田中 宏暁	「原料を目的としたヘルスツーリズム研究」に関する寄付	¥1,800,000
サントリーグローバルイノベーションセンター(株)	田中 宏暁	「減量を目的としたヘルスツーリズム研究」に関する寄付	¥350,000
(株)アサヒコーポレーション	田中 宏暁	研究助成寄附	¥1,000,000
サントリーウエルネス(株)	田中 宏暁	運動と疾病予防に関する研究助成のため	¥2,000,000
サントリーグローバルイノベーションセンター(株)	田中 宏暁	研究助成	¥2,150,000
(公財)福岡労働衛生研究所	田中 守	研究助成のため	¥600,000
公益信託第 24 回日本医学総会	布目 寛幸	第 24 回日本医学会総会記念医学振興基金	¥65,850
SR ハイブリッド(株)	布目 寛幸	人工芝のバイオメカニクスに関する研究	¥604,440
(財)日本プロサッカーリーグ	布目 寛幸	サッカースパイクの安全性に関するバイオメカニクス研究	¥645,717
コカ・コーラウエスト(株)	布目 寛幸	自販機のオペレーションにかかわる肉体的な労働負荷の研究	¥2,500,000
住友ゴム工業(株)	布目 寛幸	ロングパイル人工芝のバイオメカニクス研究	¥500,000

研究助成寄付金 (H27 年度)

研究助成寄付金	研究代表者	研究課題	金額
(株)モリタファインケミカル	田中 宏暁	研究助成寄附	¥198,000
田中 宏暁	田中 宏暁	研究支援	¥1,500,000
(株)アサヒコーポレーション	田中 宏暁	研究助成寄附	¥1,000,000
キッセイ薬品工業(株)	上原 吉就	脂質異常症の研究のため	¥500,000
第一三共(株)	上原 吉就	高血圧領域における家庭血圧管理に関する研究助成	¥2,000,000
ヘルスケア食品研究所	畑本 陽一	「不活動な生活は食欲調節能力を低下させるのか？」に対する研究助成	¥500,000

12 関連資料一覧



- * 福岡大学 大学案内
- * 福岡大学スポーツ科学部 学部案内

- * 福岡大学スポーツ科学研究

- * 福岡大学 研究推進部年報 2016
- * 平成 27 年度教育開発支援機構年報
- * 地域ほっとブック 2016～まちづくり最前線！福岡大学～(福大地域ネット推進センター)

- * 体育・スポーツのエキスパート育成プログラム
- * ココロとカラダのウェルネスプログラム (Web 版)

- * 卒論抄録集
- * 教育実習記録集
- * 教職事前実習記録集
- * キャンプ実習記録集

福岡大学スポーツ科学部年報 創刊号 平成 27 年度

発行日 平成 28 年 10 月発行

編集者 学部年報編集委員会

田口晴康 森口哲史 今村律子

発行者 福岡大学スポーツ科学部

〒814-0180 福岡市城南区七隈八丁目 19-1

TEL : 092-871-6631(代) FAX : 092-865-6029

印刷所 有限会社新幸印刷

〒830-0045 福岡県久留米市小頭町 10-1-2F

TEL : 0942-38-0898

